

小澤征爾と足柄上郡金田村（現在の金井町）

’24・5・28 遠藤紀忠

「中国に生まれて、日本に育った僕がどこまで西洋音楽を理解できるか。一生かけて実験を続けるつもりだ。幸い、主治医の先生から食道がんから「無事卒業」のお墨付きをいただいた。今後も音楽を追求し、次の世代を育てる事が僕の使命だ。それがお世話になった人たちへの恩返しにもなると信じて。」

小澤征爾著『おわらない音楽』（日本経済新聞出版社、2014）

戦後日本のクラシック音楽界を牽引し、名門ボストン交響楽団の音楽監督を長期(29年)に務め、世界の楽壇の第一線に立ち続けた指揮者・小澤征爾が2月6日に88歳で死去した。

小澤征爾一家は1947年(S22)より1950年(S5)神奈川県足柄上郡金田村（現在の金井町）に住んでいました。以下小澤征爾一家の金田村時代とその後小澤征爾が国内外でキャリアを積み、世界の名門オーケストラ、音楽祭の音楽監督に就任し“世界の小澤”として活躍した半生を以下に記してみました。

小澤征爾とその家族

小澤征爾は1935年(S10)旧満州国奉天（現在の中国瀋陽市）で小澤開作、さくらの三男として誕生。小澤開作は山梨県生まれ。東京で苦学して歯科医になり、中国長春で歯科医院を開業、1927年(S2) さくらと結婚。1931年満州事変以降政治活動に入り、政治団体「満州国協和会」の創立委員として奉天に移り住んだ。満州青年連盟長春支部長を務めた時に関東軍作戦参謀の板垣征四郎、石原莞爾に目をかけられ、親しく交わる。「征爾」の名前は二人の名前から一字ずつもらって付けた。

一家は1936年(S11)北京に転居。1941年(S16)父開作を残し北京より東京立川市に転居。1943年(S18)父・開作帰国。

父開作（1898～1970）

母さくら（1908～2002）

長男克己（1928～1984） 諸井三郎に師事して作曲を学ぶ、東京芸術大学彫刻科卒

パリに留学 彫刻家

次男俊夫（1930～ ） 小田原高校卒 東北大学文学部卒 昔話研究者 筑波大学
名誉教授、小澤昔ばなし研究所所長

三男征爾（1935～2024） 指揮者

四男幹雄（1937～ ） 早稲田大学仏文科中退 俳優、放送タレント、エッセイ
スト

音楽との出会い 讃美歌、アコーディオン

（北京時代）日曜日になるとクリスチャンであった母親に連れられ教会で讃美歌を歌う。家庭でも讃美歌を合唱した。征爾 5 歳の時にアコーディオンを購入、長兄克己はこれをマスターし合唱の伴奏をした。この讃美歌、アコーディオンが征爾の音楽・楽器との出会いであった。

初めてのピアノ

立川小学校 4 年生の時に学校で初めてピアノに触れた。長兄克己が旧制府立二中（現在の都立立川高校の）の音楽の先生にピアノを習い始めていたので征爾も二中でピアノを練習した。

その頃父開作が横浜で中古のアップライトピアノを見つけ購入した。ただし横浜から立川までのピアノの運送手段がなく兄たちがリヤカーを引いて横浜まで行き 3 日かけて立川に運んだ。征爾は長兄克己からピアノの手ほどきを受けた。5 年生の秋には学芸会で『エリーゼのために』を弾いた。征爾が後年「わが家に芸術を持ち込んだのは克己兄貴だったな。その功績はおおきいよ」と語っている。（『小澤征爾兄弟と語る』より）

俊夫の同級生にレコードマニアがいてその方の家でクラシック曲を聴かせてもらい、さらに俊夫兄の知り合いのピアニストの方の生演奏を聴く機会があり、この頃から征爾は音楽を体に染み込ませていった。

金田村時代 征爾はピアノを小田原の石黒先生に習う

1947 年（S22）父開作がミシン製造の会社を始め、立川の家を売り払い、神奈川県足柄上郡金田村（現・大井町）へ転居した。築 100 年の古家を購入、大規模な改築工事を必要とした。征爾と幹雄は、田んぼの向こうに富士山が見える小さな金田村小学校に転入した。転入時征爾は小学校 6 年、幹雄は 4 年生。征爾は翌年 1948 年 3 月金田村小学校を卒業、4 月成城学園中学校に入学し、片道 2 時間半かけて通学した。2 年生の時に成城学園のすぐ近くに下宿した。征爾は金田村時代ピアノを小田原の音楽指導者であった石黒修三先生の奥様に習っていた。

次兄俊夫は 1949 年（S24）4 月神奈川県立小田原高等学校を卒業。小田原高等学校時代

俊夫らが中心となり混声合唱団「シグナス」(*1) を設立した。

小澤家は 1950 年 (S25) 金田村から東京都世田谷区代田に転居。

(*1) シグナス合唱団：1947 年 (S22) に小田原市内の 3 つの高校の合同合唱団として設立された。初期のころのメンバーには小澤征爾の兄 (克己、俊夫) がおり、この縁で**征爾がシグナス合唱団のピアニストを務めた**ことがあった。「シグナス合唱団」は 1955 年 (S30) から団員対象を一般に変え現在も活動している。

「成城学園中学校」時代 ラグビーで指を骨折「指揮者」を選択

父開作が北京で新しく作った新民会という組織で親しかった豊増秀俊 (弟が豊増昇) の紹介で豊増昇 (*2) にピアノを習った。

同時に同級生の松尾勝吾 (新日鉄釜石の松尾雄治の叔父) のすすめでラグビーをはじめ。

中学 3 年になる直前ラグビーの対抗試合で両手の人差し指を骨折し、さらに顔を蹴られて救急車で病院に運ばれ入院した。退院後包帯だらけの姿で豊増先生のお宅に伺い「もうピアノは続けられなくなりました」と告げた。「音楽をやめるのか」。黙っていたら先生が口を開いた。『指揮者』というのがあるよ。初めて聞く職業だった。指揮者もオーケストラも見たことがなかった。

指の怪我でピアノが弾けなくても、音楽はやりたいと、中学 3 年の時に学内の賛同者を集めて讃美歌を歌う合唱グループ「城の音」を立ち上げ征爾が指揮をした。さらに成城に昔からある男性合唱団「コーロ・カステロ」にも顔を出し、黒人霊歌やロシア民謡を歌った。ある日、日比谷公会堂でロシア出身のピアニスト、レオニード・クロイツァーがベートーヴェンのピアノ協奏曲『皇帝』を弾きながら日本交響楽団を指揮するのを聴き、指揮で音楽が変わる事を経験した。指はまだ思うように動かない。指揮者への道を模索した。

この様な時に母親が「うちの親戚に指揮者がいるよ」と教えてくれた。母親の亡くなった伯母の息子がチェロ弾きで。指揮をやるという。名前を斉藤秀雄といった。

(*2) 豊増昇 (1912~75) ピアニスト。音楽教育者。日本ピアノ界の草分けの一人。「ピアノの巨人」と言われた。日本人として初めてベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の定期演奏会に出演。門下生には小澤征爾のほか、園田高弘、館野泉らがいる。

桐朋女子高校音楽科・桐朋学園短期大学音楽学部 斉藤秀雄の本格的なレッスンを受ける

1950年（S25）母方の遠縁にあたる指揮者・チェリストの斉藤秀雄（*3）を訪ね、弟子入りを頼む。斉藤より「1年後に桐朋学園女子高に音楽科を新設するから、そこに入りなさい」といわれ、成城学園の高校に進学して1年待った。この間に柴田南雄先生に作曲を、小林福子先生に聴音を習った。指揮は斎藤先生の弟子の山本直純さんに基本を教わり、月に2度ほど斎藤先生に直接指導を受けた。

1952年（S27）桐朋女子高校音楽科に一期生として入学。斉藤秀雄の本格的なレッスンを受ける。斉藤先生はめっちゃめっちゃ厳しかった。指揮のレッスンはピアノをオーケストラに見立てて行った。高校3年の卒業公演で桐朋オーケストラを相手にバッハの『シャコンヌ』を振ることになった。もとはヴァイオリンのための曲を、斎藤先生がオーケストラ用に編曲したものだ。十数分の曲を先生は半年もかけて征爾に指導した。

1955年（S30）斉藤が教授を務める桐朋学園短期大学音楽学部へ進学。

1957年（S32）同校を卒業。その後斉藤の紹介で群馬交響楽団の指揮を始めた。

1957年12月日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会のラヴェル『子供と魔法』で、渡邊暁雄の下で副指揮者を務める。

（*3）斉藤秀雄（1902～1974）

チェロ奏者、指揮者、音楽教育者。西洋音楽の卓越した指導者であり、日本のクラシック音楽の発展に大きな足跡を残した。ドイツへ二度留学。戦後井口基成、吉田秀和らと「子供のための音楽教室」を創設、やがてこの教室が桐朋学園大学音楽学部に発展した。斉藤秀雄は征爾の母親小澤さくらのまたいところにあたり、征爾はその縁で斉藤秀雄に師事し、指揮を学んだ。

ヨーロッパで音楽武者修業 スクーター、ギターとともに貨物船“淡路丸”で単身ヨーロッパへ

1959年（S34）2月1日より成城学園時代の同級生の父江戸英雄（*4）、水野成夫（*5）らの支援を受け、スクーター、ギターとともに貨物船“淡路丸”で単身ヨーロッパに渡り、その年にフランスで開かれた第9回ブザンソン国際指揮者コンクール（*6）で日本人として初めて指揮部門で優勝した。コンクール後のパーティーでシャルルミンシュ（*7）に弟子入りを申し出て、ミュンシュよりタングルウッド音楽祭（ボストン）へ行くことを進められた。

1960年夏ミュンシュの言葉に従いタングルウッド音楽祭に参加。その指揮コースで、ボストン交響楽団の音楽監督であったミュンシュに師事。このコースで優秀な学生指揮者に贈られるクーセヴィツキー賞を受賞した。

(* 4) 江戸英雄 : 三井不動産社長、ピアニスト江戸京子の父

(* 5) 水野成夫 : 文化放送・フジテレビの総師

(* 6) ブザンソン国際指揮者コンクール : フランスのブザンソンで開催される国際音楽祭の一環として 1951 年に創設され、指揮部門と作曲部門があり、世界的な音楽家の登竜門として知られる。

(* 7) シャルル・ミュンシュ (1937 ~ 1946) : フランスのヴァイオリニスト、指揮者。パリ音楽院管弦楽団の指揮者、1949 ~ 1962 ポストン交響楽団の常任指揮者。

パリに戻った小澤はヘルベルト・フォン・カラヤンの弟子を決めるコンクールを受けにベルリンまで行き、合格。カラヤンと小澤の 30 年にわたる師弟関係が始まった。1961 年 (S36) 2 月には日独修好百年記念コンサートでベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を初めて指揮。

1961 年 4 月、小澤は、ヨーロッパを離れ、レナード・バンスタインが音楽監督を務めるニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者に就き、レナード・バンスタインのアシスタントとなった。1962 年 (S37) 1 月にはサンフランシスコ交響楽団にデビュー。

「N 響事件」⇒日本での音楽活動を止めて欧米で勝負

1962 年 (S37) 5 月にニューヨーク・フィルの副指揮者を終えた 26 歳の小澤は、同年 6 月に NHK 交響楽団の「客演指揮者」となり 7 月には N 響を指揮してメシアン《トゥーランガリア交響曲》の日本初演を行った。同年 10 月の N 響の東南アジア・沖縄の演奏旅行を率いた。同年 12 月に楽団員との摩擦が表面化し、楽団員が小澤の振る演奏会をボイコットするいわゆる「N 響事件」が起きた。

この騒動で小澤は N 響客演指揮者を辞任、日本での音楽活動を止めて欧米で勝負する決意を固め、1963 年 (S38) 1 月渡米した。小澤はその後 32 年間 NHK 交響楽団と共演しなかった。

小澤はこの事件を振り返り「でも僕にとって良かったね。日本が好きだったしあれがなかったら日本にへばりついちゃって外国に出る勇気がなかったかもしれないんだ。あれでもう出ざるを得なくなって、外国でやんなきゃだめだと、こう縁に立って後ろがないんだから。それが僕の場合とても良かった。」と語っている。

“世界の小澤”として活躍

N 響事件後は欧米・国内で著名なオーケストラを指揮し、音楽監督を務めた。主なオーケストラ名を下記に記す。

- 1964年1月 トロント交響楽団音楽監督に就任（～1968年）
- 夏 シカゴ交響楽団によるラヴィニア音楽祭で音楽監督として音楽祭を成功させる。（この後5年間音楽祭を指揮）
- 9月 バーンスタインに代わって、ニューヨーク・フィルの指揮をになう。（翌年4月まで）
- 1965年3月 ロンドン交響楽団を指揮し、イギリスデビュー。
- 1966年8月 **ウインフィルハーモニー管弦楽団を指揮し、ザルツブルク音楽祭にデビュー。**
- 9月 ベルリンフィルの定期に初登場。
- 1968年1月 ボストン交響楽団の定期に初登場。
- 8月 ザルツブルク音楽祭でカラヤン指揮『ドン・ジョヴァンニ』の副指揮者を務める。
- 9月 **日本フィルの首席指揮者兼ミュージカル・アドヴァイザーに就任**
- 12月 パリ管弦楽団の定期に初登場
- 1970年7月 タングルウッド（ボストン）音楽祭の音楽監督に就任
- 12月 **サンフランシスコ交響楽団の音楽監督に就任（1976年音楽監督を辞任）**
- 1972年7月 新日本フィルハーモニー交響楽団を結成、
- 1973年9月 **ボストン響の音楽監督に就任（～2002年）**
- 1974年7月 エフゲニー・オネーギン（チャイコフスキー作曲）でロイヤル・オペラにデビュー
- 1981年10月 ボストン響創立百年の記念演奏会を指揮。日本、パリ、ベルリン、ウィーン、フランクフルトなどを回る世界ツアーを実施。
- 1982年5月 ベルリン・フィル設立百年記念演奏会を指揮
- 2002年1月 **ウィーン・フィルのニューイヤーコンサートを指揮**
- 9月 **ウィーン国立歌劇音楽監督就任（～2010年）**
- 2013年 水戸芸術館第2代館長に就任水戸室内管弦楽団を指揮した。

「斎藤秀雄メモリアル・オーケストラ」を編成

- 1984年9月 斎藤秀雄没後10周年の記念コンサートを指揮者秋山和慶と開催。サイトウ・キネン・オーケストラ結成へと発展
- 1992年9月 長野県松本市で国際的音楽祭「サイトウ・キネン・フェスティバル松本」を

立ち上げ、自ら総監督に就任。毎年大きな注目を集めた。

「小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト」スタート

ローム(株)の佐藤研一郎社長と小澤征爾がオペラを通じて若い音楽家を育成する事を目的に2000年6月に立ち上げた教育プロジェクトです。恩師カラヤンの教えである「交響曲とオペラは車の両輪のようなもの」を持論とする小澤が、「教えること」に生涯を捧げたもう一人の恩師斉藤秀雄のスピリットを受け継ぎ、若い音楽家たちとともに学ぶ場として開催している。

毎年、国内外でのオーディションで選ばれたアジア諸国の若い音楽家たちでオーケストラを結成し、小澤征爾とサイトウ・キネン・オーケストラメンバーをはじめとする演奏家のもとで指導を受け、分奏や歌手とのリハーサルを重ねながら、世界で活躍するオペラ歌手や演出家とともに高水準のオペラ「小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト」を創り上げた。

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトはこれまでに、モーツァルト:「フィガロの結婚」、プッチーニ:「ラ・ボエーム」、ビゼー「かるめん」、マーラー:交響曲第2番「復活」等を演奏してきました。

参考資料

音楽の友 音楽之友社 2024 4月

Newsweek 2024 3・5

小澤征爾著『終わらない音楽』 (日本経済新聞社 2014・7・25)

小澤さくら『北京の碧い空を』 (二期出版、1991)

小澤俊夫・征爾・幹雄著 『小澤征爾兄弟と語る』(岩波書店 2022)